やまびこ

枯れ松に想ふ

錦田　剛志

かつて、出雲平野のほとんどの民家には、築地松と呼ばれる松林の屋敷林があった。屋敷を矩形（L字状）に囲むこの林は、もともと大河、斐伊川の洪水と冬場に吹き付ける北西の強い季節風から母屋をはじめとする家屋を護る防災林であった。のちに常に青々と、理髪された男の頭のごとく直線的に刈り揃へられた端正な姿は、長らく散居村の暮らしに溶け込み、家々の豊かで平穏な暮らしを象徴する風物となった。春夏秋冬、出雲平野の四季を彩る景色の主役であって、自然と人間の共生の歴史を物語る景観の要でもあった。

ところが、昭和五十年代後半以降、この地にも松枯れの被害が本格的に到来した。おそらく数年間をかけて徐々に侵食したに違ひないが、私にはそれが瞬く間の出来事として記憶されてゐる。濃緑色の美しい築地松は見る見るうちに赤茶け、まさしく虫が食ひ荒らしたかのやうに次々と伐採の憂き目を見ることになった。その猛威は止まることを知らず、今では、出雲平野の九割の築地松が侵されてしまったと聞く。

松枯れの主犯は、特定種のカミキリムシに寄生する松食ひ虫だとされ、また酸性雨などの大気汚染もその共犯者と言はれて久しい。農薬散布や薬剤注入などその都度さまざまな対策が講じられてはゐるが、未だ特効薬は見つかってゐないのが現状である。

▲▽

被害は、築地松にとどまらない。島根半島や中国山地の山林を形成する松林も今や壊滅的な打撃を受けた。山稜によっては、紅葉の季節と一切の関はりなく常に褐色を呈し散々たる有様である。鎮守の森も例外ではない。西日本の社叢といへば、照葉樹や常緑広葉樹を想像されるであらうが、当地には松林もかなりの頻度で見受けられる。有為無為を問はず、氾濫源の沖積平野に堆積する砂地が求める植生として適当なためであらうか、あるいは築地松同様、防災林に端を発し田園風景の美観を保つのにふさはしい樹林として醸成されたものであらうか、松林が多い理由は判然としない。

御奉仕する万九千社、立虫神社の森も、かつて樹齢二百年を超える老大木が立ち並ぶ松林として近隣にその威容を誇ってゐた。ところが、昭和六十年頃から、その大方が枯れ伐採せざるを得なくなった。平成に入る頃には、周囲から社殿全体がほぼ露はに見渡せる状況となり、もはや森でも林でもなくなった。見るに見かねた氏子が、再び松の苗木を植ゑた。今日ではやうやく拝殿の高さほどに成長してゐるが、かつての面影には程遠い。

しかし、何故、再び松なのか。筆者とて「また、枯れてしまふやうな松を植ゑてどげするかね」と疑義を呈したものの、「やっぱりお宮さんは松でないといけん」と氏子に言はれて「はっ」とした。お正月の門松を挙げるまでもなく、松の本義には、「神を待つ」、「祭る依代」としての霊力、呪力が内包されてゐることに改めて気づかされた。松の樹力は呪力でもあるのだ。産土に根付く自然信仰の奥深さを垣間見る思ひがして胸が熱くなった。何とかこの樹木を護り継ぎたい。

▲▽

さて、そんな松の行く末を案じるうち、今日の世相が重なり見えた。母屋を護るはずの築地松の枯死に、着実に家庭を蝕む父性の喪失とそれに表裏する家族崩壊の姿が想ひ浮かんだ。もう一つ、聖樹たる松の枯れゆく様に自然への畏敬、いや「神をマツ（待つ）、マツ（祭）る」心それ自体の軽んぜられる風潮、思潮が危ぶまれたのである。いささか憂ひに過ぎるであらうか。

一度失はれた景観の復興が困難な道をたどるのと同様、衰退する信仰や祭祀の伝統を振興するのは至難の業である。されば枯死といふ事態に陥る前に、特効薬を探し、新たな苗木も植ゑ付けていかねばなるまい。我々若手神主が、その薬剤師と植木職の主たる担ひ手であることを肝に銘じつつ……。

にしきた　つよし　島根・立虫神社万九千社禰宜